

地域活性化という「遊び」①

京都市 福知山市 「みわ・ダツシュ村」から

山本晋也

新連載 連載を通して、古い新しいにとられない自由な発想から問題解決に向かう姿勢みたいなものを、子育てや限界集落の生活からすくい取ってみたいと思います。

「わははははははは」

節分の日

山と小川と畑以外な一人もない山合いにある小さな集落の集会所から大きな笑い声がこだまする。

集会所と言っても軽量鉄骨造りのいわゆるプレハブ。

プレハブと言ってもきちっとした完成品ではなく

窓、畳、カーテンからストープに至るまで集落の人たちが

それぞれに余ったものをちょこちょこ出し合いながら完成した

なんとも味のある寄せ集め建築。天井際の壁には

「カーテン 寄付 河内××」「こたつ 寄付 和泉××」

などと筆で記された木の札が

何枚もかかっている

その木の色がそれぞれの時代を表している。

たくさんある札にある名字は全て河内さんか和泉さんのどちらか一つ。

なので今ここにいる山本という名字の僕達は全くのよそ者です。

「耕作放棄農地再生」と「限界集落の活性化」を掲げる

みわ・ダツシュ村 清水三雄村長との出会いがあり

僕たち5人家族がこの地に移り住んだのは7年前。

当時集落には13人の方が住んでおられ僕らを合わせると18人と一気に40%

も増加。

その後3人家族の新たな移住者を受け入れましたが

環境の厳しさなどから僅か1年でギブアップ。

しかし

5年前には我が家で唯一の地元民となる長女が誕生し19人と微増。

小さいながらもしつかり受け継がれていた夏祭りなどの行事も

元気な子供の声でうるさいほど賑やかに大いに沸きました。

都会に暮らしていたとき住宅事情によっては

子供の声がうるさいと問題になることもあり、元気な男の子3人を持つ

親としては苦労や気遣いが絶えなかったのですが

ここのじいちゃんばあちゃんに言わせると

「わしら耳がとおいけえ、うるさい

筆者プロフィール

1968年、京都生まれ。美術大学を卒業して渡米後、京都で現代美術作家として活動。そのかたわらオーガニックレストランを経営するも食材を種から作ってみたいとなり、京都市内で畑を始める。結婚して3人の子供を授かったころ、農業生産法人みわ・ダツシュ村の清水三雄と出会い、福知山市の限界集落に移住。廃屋を修繕しながら家族で自給自足を目指す。土と向き合ううち田畑と山や川、個人とコミュニティの関係やその重要性に気がつき、田舎も都会もすべて含めた「大きな意味での自給」を強く意識するようになる。この考え方は、美術家時代にドイツの現代美術家ヨゼフボイスのすべての人々が参加して創り上げる社会彫刻という概念に影響を受けた。現在みわ・ダツシュ村副村長。

ぐらいがよう聞こえてちようどええ」

となつて問題になるどころか逆に喜ばれてしまいました。

そんな山とか川の他になんにもないところに引越して

子供が退屈するんじゃない？勉強とか大丈夫？

という心配も友達や身内からたくさんいただき心配もしましたが

こちらもしぎやってみると全く問題無し。

問題どころかむしろメリットの方が大きかったです。

都会にいて

テレビやゲームに囲まれてるとあまり考えなくても、それがそれなりに楽しませてくれるし

たとえ飽きてしまっても他の誰かが新製品つてものを考えてくれるので

別に自分から何もしなくてもそれなりに楽しいという状況が続いてしまうわけです。

しかしこんなところに来てものがあまりなくて退屈して退屈してとことん退屈する。

親も教えてくれないとなるといやでも何か自分から楽しいことを見つけていかなきゃしょうがないし何か一つでも自分で見つけられたら大きな自信になるし自分で楽しみを作り出すということ自体が楽しみになってくるんですね。

そういうわけでこんな環境にちよつとした本とノコギリくらい与えて放っておくと知らない間にいろんなものができてます。

刀や木のパチンコのような遊び道具から

コップやお箸などの食器
もちろん秘密基地もエスカレートして竹を三枚重ねにして

ベニヤ板くらいなら平気で貫通する
弓矢が作ってあったり

久しぶりに矢にする篠竹を親子で採りに行って「束ねる紐を忘れた」という僕に「紐とか無かっててもそこ

らに蔓があるやん」と

こちらが子供に教えられるまでに成長していてびつくりということもしばしば。

台風が迫っていて強風が吹き荒れていた時など

あまりに楽しそうに騒いでいるのでなんだろうと声がする方へ行ってみると

稲刈りが終わった田んぼで

1・8m角の小さなブルーシートに両手両足を縛り付け

畔からムササビのように風に乗って飛ぶという

なんとも危険極まりない遊びを發明していたこともあり

怒鳴りつけようとしたがその発想の面白さと運動能力に感心して



ものすごい風の中、ブルーシートを使って楽しい(?)遊びを發明する子供たち

怒ることをやめて写真を撮ったこともありました。

夢中で遊ぶ子供は大人が信じられないくらいクリエイティブになれるのです。

なぜか?

大人から見えてくだらない遊びでも子供にとつて夢中で遊ぶということ

は脳がフル回転の真剣勝負。

人間が自らの能力を最大限に發揮し物事に真剣に取り組めば解決できない問題なんてありません。

そしてやっていたことがどんなことであれ

この夢中になって自らの能力を最大限に發揮し脳がフル回転させる

という経験をしたことのある子は大人になって勉強とか仕事に取り組



今年の節分の日、村にあるものを持ち寄って鍋を囲む

むようになった時それらを同じく「遊び」と解釈できた瞬間素晴らしい集中力を發揮し大成功します。

だから仕事ができる人はみんな間違いない仕事で遊んでいるのです。

節分の日

節分の日には毎年みんなで集まってお金集めてどこからお弁当をとるのですが

今年も鍋。今まではみんなで集まるたびに

「昔はみんなで作りよつたけどなー」っていうのを聞いて

「それ楽しそうじゃないですか、次回やりましょう!」

という僕らの一声で決定。

ネギに白菜、お餅にお米と村にある



節分と誕生日が近いばあちゃんも来てくれたのでサプライズでお祝いました

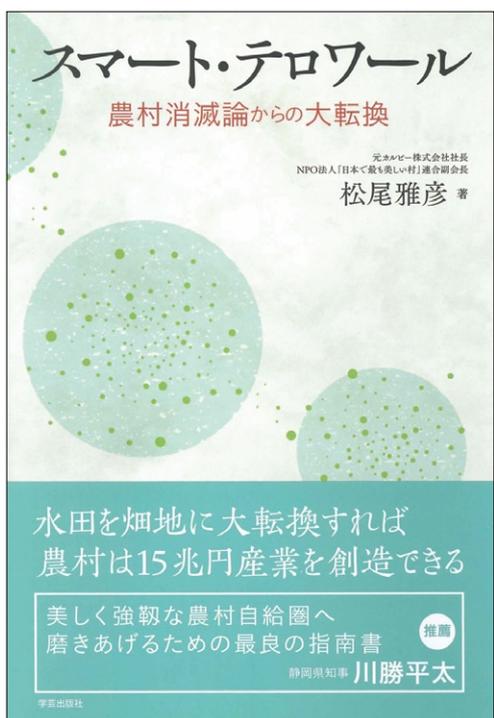
ものいろいろ持ち寄ってみんなで準備。お酒も入って大人たちが昔の話で盛り上がりだすと子供たちは退屈し始めおかしやなんかを放り投げて遊びながら食べたたりしました。常識的には食べ物でそんなこととして怒られるのですがお酒も入って人間も80超えとおおらかというか怒る人が誰もいません。エスカレートした子供は5mくらい離れたところからパチンコでおかしを発射し、もう一人がそれを食べるという遊びを始めました。

もうさすがに怒られるかなと思いましたがなんとみんながそれに注目し始めしまいには「がんばれー」と声援が飛び始めました。しかし距離5mとなると口で受けるのはなかなか難しくあんまりにも成功しないことにしびれを切らした最年長85歳のじいちゃんが

「どれ、わしにかしてみい」と腰を上げパチンコ役に立候補。それでもなかなか成功せずそれから30分以上も経過してもうやめようかと思ったその瞬間おかきが次男坊の口に吸い込まれていきました。

文頭にある「わははははははは」はその時の大歓声です。退屈したらじいちゃんばあちゃんの喜びそうな映画でもと一応用意はしてたのですが退屈した子供がおおいに盛り上げてくれました。僕はこういうことを通して地元の人を地域活性化という「遊び」に巻き込んでいきたいと思っています。

スマート・テロワール 農村消滅論からの大転換



曖昧な活用の100万haの水田を畑地に 大転換すれば農村は15兆円産業を創造できる

限界集落、市町村消滅!? 本当だろうか。消滅どころか、農業・農村にこそ成長余地がある。その実現を阻んでいるのは、水田を偏重する「瑞穂の国」幻想だ。余っている水田や休耕田を畑や放牧地に転換し、その生産物を域内の工場で加工すれば、味はもちろん、価格も、輸入原料によるナショナルブランド商品に負けないものがつくれる。その商品を域内の消費者に新鮮なうちに届け、最高の状態で提供するとともに流通コストを抑える。ここで大切なことは高級品ではなく、日常食品でシェアを確保してこそ量のメリットも得られることだ。そうしてこそ、一部ではなく全体の復活につながる。曖昧な活用の水田100万haがよみがえれば、15兆円の新しい産業創造につながる(ジャガイモの生産と加工によるカルビーの工場出荷額から試算)。契約栽培で市場価格の30%オフを実現したカルビー元社長の「辺境からの変革」の提案。

松尾 雅彦 著 書籍 四六判・256頁 学芸出版社刊
■ 1,944円(税込) + 郵送料360円